

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34510

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720114

研究課題名（和文） ヴュフォン『一般的個別的博物誌』に見られる自然概念と自然記述の形成について

研究課題名（英文） The Formation of the idea of nature and the description of nature in the "Histoires naturelles générales et particulières" of Buffon.

研究代表者

大橋 完太郎 (OHASHI KANTARO)

神戸女学院大学 文学部 講師

研究者番号：40459285

研究成果の概要（和文）：

本研究は、十八世紀フランスの博物学者ヴュフォンの思想における理論的核を抽出することを目的としている。本助成を受けた研究を通じて、ヴュフォンの『博物誌』における生物発生の理論と、修辞家としてのヴュフォンの名を確かにした著作『文体論』とのあいだに理論的同形性が存在していることが判明した。生物の発生と人間の思考の両者に共通するこの発生論的アナロジーが、ヴュフォンの思想のオリジナルな点であり、それによって生物学と文学とを架橋することが可能になっていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This research project aimed at pointing out the theoretical core of the French 18th Century's naturalist The Baron of Buffon, who was famous for his great work of Natural History. Through the survey of the first parts of his *General and Particular Natural Histories*, it was found that there existed the analogical order of his thinking, which enabled him to explain at once generation of animals and the formation of the development of human thoughts. This internal consistency between his discoveries on natural study and his rhetorical ideas written in *Treatise on Style* would be marked as a main feature of his thinking.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：フランス文学、フランス思想

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：啓蒙思想、自然史、博物学、修辞学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、18世紀後半の実証科学の成立以降多くの学問世界で失われてしまった人文諸科学と自然科学との統一とい

う側面がある。ヴュフォンの博物学は、出版された18世紀半ばには非常に多数の読者を獲得したものの、その後の自然科学の進展のなかでは参照されることはなく、人文主義

的教養をそなえた文人としてのビュフォンの姿が19世紀以降の文学論において取り上げられることになる。こうした自然史家ビュフォンの姿は必ずしも誤りではないものの、ビュフォンが残した理論的インパクトを過小評価してしまうことにもなりかねない。実際、ビュフォンによる自然観念と自然描写が、当時の科学のみならず後代の文学にまで影響を与えている。総合的な知識人としてもビュフォン像を提示し、生物理論の探求と文体を通じたその実践とを融合した彼独自の方法を考えることで、単純な分裂に陥りかねない人文学と自然学の状態を再考し、新しい知見を促す契機とすることができるのではないだろうか。生誕300年を迎えるにあたってフランスではビュフォンに関する総合的な研究が出版され、新たな『博物誌』の校定版の編集も進んでいる。だが、博物学者ビュフォンの理論的中枢を検討するための研究は、今日までの日本ではきわめて数が少ない。こうした現状を踏まえ、ビュフォンにおける自然と文体の考えを中心に据えた研究が人文学の領域で望まれると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、18世紀フランスの博物学者ビュフォンの主著『一般的個別的博物誌』を主たる対象にして、ビュフォンの博物学の今日的意義を自然観とその記述という観点から分析することを試みる。『博物誌』に表された自然記述の具体的な様態とその方法論の分析と、それを生み出したビュフォンの自然観の形成要因を歴史的事実的なレベルから探ることを通じて、近代化の途中で精密科学的な方向へと展開した「自然史」概念の萌芽段階において、狭い意味での科学性へと還元されない言説と理性・想像力の関係に関するもう一つの可能性を探ることができる、それは

人間と環境の関係性を人文学的な視点から再考する試みでもある。

## 3. 研究の方法

ビュフォンによる自然史的考察の主著『一般的個別的博物誌』の前半部におかれている彼の方法論、動物の存在論と発生論、人間論を主に参照し、同時代の百科全書派や啓蒙主義知識人、あるいはフランス以外の自然学者の言説と比較検討することを通じて、『博物誌』前半部においてビュフォン独自の自然概念がどのように提示され、それが彼によっておこなわれた自然記述をメタレベルで方向付け、彼独自の文体概念や言語観を構成しているのかを検討する。

## 4. 研究成果

### 【2009年度】

初年度となる2009年度は、基礎的な作業を進めた。以下文献を対象とした研究、関連研究者との連携、海外での研究協力の三点に分けて記す。

(1) 文献研究：ビュフォンの著作『一般的個別的博物誌』の読解を先述した計画に従って進めた。とりわけ『博物誌』第二巻・第三巻を占める「人間の自然史」「人間誌」を参照し、1749年当時のビュフォンの思想における人間の位置取りを確認することができた。夏期にフランスにおいて現地調査を行い、これに関連する多くの文献を参照し、入手することができた。

(2) 他の協力者との連携：申請者は鷺見洋一氏（中部大学）を代表とする科学研究費補

助金基盤研究 (B)「フランス『百科全書』研究」に研究協力者として参加した。この研究によって集積された『百科全書』メタデータを活用することでビュフォンが『百科全書』に与えた影響の詳細を確認することができる。これらのデータを用いてビュフォンの記述にディドロが注釈を加えて編纂した項目「動物」に関する更に精緻なレベルでの読解が可能となる。この点に関して、18世紀の百科全書と啓蒙に関する専門誌『ディドロ及び『百科全書』研究 *Recherches sur Diderot et l'Encyclopédie*』上に鷲見氏および他の研究者との共著論文を刊行し、『百科全書』におけるデータ解析の基本作業を行い、それを発表することができた。

(3) 海外での研究協力要請および文献収集：フランスでの在外調査において文献および史跡に関する調査を行い、また、ベルギーのブリュッセル自由大学哲学科のブノワ・ティンメルマンス Benoit Timmermans 教授とコンタクトを取り、研究上有効なアドバイスを得るのみならず次年度につながる研究協力体制を構築することができた。

#### 【2010年度】

2010年度は引き続き、ビュフォン『博物誌』に表わされている概念的な骨子を中心対象として検討した。『博物誌』第1巻における「序言」におけるビュフォンの脱デカルト的な科学的探索の手法の分析から初めて、「動物誌」において展開された動物発生論、具体的には「内的鑄型」の名で知られるビュフォン独自の発生理論の仕組みと射程を再検討し、最終的に得られた成果をビュフォンが別の機会に執筆した「文体論」における文体の生成理論と比較検討することで、生物界の理論と修辞の理論とのアナロジカルな関係を

抽出することができた。こうした手続きを経て、博物学的な視座から形成されたビュフォンの思想が有する生物学史上の意義および文学理論上の意義を明らかにすることができたと考えられる。とりわけ文体理論が彼の生物理論とはっきりしたアナロジカルな関係におかれていることは、従来まで指摘されてこなかった事項として特筆すべきものであると考えられる。

上述の成果は国内外でそれぞれ発表され、多くの研究者から批判的に吟味する機会を設けることもできた。国内では十八世紀学会にて発表し、当時の生物理論との関係の詳細や、新プラトニズムとの関係についての教示を得ることができた。また海外では国際美学学会にて発表し、十八世紀の博物学理論とアクチュアルな環境思想との接点を模索するきっかけについて多くの示唆を得ることができた。他にも、今年度に刊行した著書『ディドロの唯物論』内の補論においてビュフォンを論じた章を設けたが、執筆箇所の再検討に際して本研究の成果が適用され、確認された文体論と生物の発生理論との図式的な類似性についてそれを公表することができた。

#### 【2011年度】

最終年度となる2011年度はビュフォン『博物誌』の前半部における動物の存在論と発生論を中心に検討し、動物と人間をめぐる当時の議論のなかに位置づけることを試みた。この課題自体は初年度から進められていたものではあるが、2011年度において具体的な進捗を見せた。とりわけ今年度は、『博物誌』と刊行期日が近く、『博物誌』同様広い読者層に受け入れられたダランベールとディドロの編集による『百科全書』における「動物」項目との比較に重点を置いて研究を進めた。その結果として析出されたのは、理神論的な

視座を保ちつつ、それが表面に出ることを慎重な仕方と避けようとしたビュフォンの思考と、そのような理神論的立場から離れてラディカルな無神論を打ち立てようとした両者の姿が、1750年前後に明白な対照として見いだされるという点である。ビュフォンの理神論とディドロ的理神論が接合するテキストとして本研究が注目したのが、『百科全書』第1巻にある項目「動物」である。本項目はビュフォンの『博物誌』の引用の抜粋に、ディドロが独自のコメントを加えるという仕方で執筆されたものであり、両者の間テキスト性の検討を通じて、ディドロによるビュフォン注解の作業がもつ思想的な含意を詳細において測定することができた。

上述の論点に関して、国際十八世紀学会においておこなった発表を行い、それをもとにして論文一編を専門学術誌に掲載することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 大橋完太郎、「『百科全書』項目「動物」読解——動物論からみるディドロとビュフォンの差異——」、『『百科全書』・啓蒙研究論集』、第1号、『百科全書』研究会発行、査読有、2012年3月31日、115-134頁。

② Yoichi SUMI, Takeshi KOSEKI, Kantaro OHASHI, et al., «Pour une édition critique informatisée de l'*Encyclopédie* : quelques précisions sur les métadonnées», *Recherches sur DIDEROT et sur l'ENCYCLOPÉDIE*, Société Diderot, n.44, 査読有, pp.140-152, 2009.

[学会発表] (計4件)

① Kantaro OHASHI, *How Buffon historicized Nature in his Natural History in Relation to his Treatise on Style*, 13th International Congress of 18th Century Congress, Graz University, 29th July. 2011.

② Kantaro OHASHI, *Plan of nature, plan of style: Relationship between the Theory of Natural History and the Rhetorical Idea on Style of Buffon*, 第18回国際美学会、北京大学、2010年8月12日。

③ 大橋完太郎、「自然と文体のプラン：ビュフォン『博物誌』における生物理論と自然記述の関係」、日本十八世紀学会、第三十二回全国大会、新潟大学、2010年6月26日。

④ 大橋完太郎、*L'humain et le monstrueux: la morale matérialiste de Diderot*, 国際ワークショップ「フランス現代思想の地平」、東京大学、2010年3月26日。

[図書] (計1件)

① 大橋完太郎、『ディドロの唯物論』、法政大学出版局、2011年、455頁。

[産業財産権] なし

○出願状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

大橋 完太郎 (OHASHI KANTARO)

神戸女学院大学、文学部、講師

研究者番号：40459285

### (2)研究分担者 なし

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者 なし

( )

研究者番号：